

Press Release
【報道関係者各位】
2016年12月

Chagall

IMAGINARY
DIALOGUES

ポーラ美術館開館15周年記念展

ピカソとシャガール

愛と平和の讃歌

PICASSO AND CHAGALL
IMAGINARY DIALOGUES

2017.3.18 土 — 9.24 日

会期中無休、ただし展示替のため、5月12日(金)は一部休室。6月21日(水)は企画展示室は休室。
開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

Picasso



ポーラ美術館
POLA MUSEUM OF ART

箱根 仙石原

「破壊する画家」ピカソと、「語る画家」シャガール。 世界初の二人展。紡ぎ出される愛と平和へのメッセージ

パブロ・ピカソ(1881-1973)とマルク・シャガール(1887-1985)は、ともに20世紀を代表する芸術家です。ポーラ美術館開館15周年を記念するこの展覧会は、二人のライバル関係に光をあて、彼らの初期から晩年までの作品をたどることで、それぞれの新たな芸術家像を浮かび上がらせる試みです。この二人の関係に焦点をあてた展覧会は、本展が世界で初めての機会となります。

ピカソとシャガールはこれまで対照的な芸術家と捉えられてきました。しかし、二人の作品を比べ合わせたとき、絵画における対象の変形や色彩といった、二人が追究した課題において、また「愛」や「平和」という主題において、共通する取り組みが見られます。ときに近づき、あるいは相反して独自性を際立たせる二人の作品約80点から、彼らの芸術の本質に迫ります。

ピカソとシャガール 愛と平和の讃歌 PICASSO AND CHAGALL : IMAGINARY DIALOGUES

● 会 期：2017年3月18日(土)～9月24日(日)

※会期中無休、ただし展示替のため、5月12日(金)は一部閉室。6月21日(水)は休室(常設展示のみご覧いただけます)

● 開館時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

● 主 催：公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館

● 特別協力：メレット・メイヤー、群馬県立近代美術館、AOKI ホールディングス

● 後 援：在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本

● 出品点数：絵画(油彩画、版画他：約80点)、タペストリー(3点)

● 会 場：ポーラ美術館(〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285) TEL：0460-84-2111

● 入 場 料：

	個人	団体(15名以上)
大人	1,800円	1,500円
シニア割引(65歳以上)	1,600円	1,500円
大学・高校生	1,300円	1,100円
中学・小学生	700円	500円

※料金はいずれも消費税込み。
※中・小学生の入場については、土曜日は無料です。
※中・小学生が授業の一環として観覧する場合、
中・小学生及び引率教員の入場は無料です。



木島俊介(ポーラ美術館館長、本展監修者)

ピカソとシャガールとは、ともに20世紀美術を代表する最も著名なアーティストである。

スペイン出身のピカソが、目まぐるしく変容していったその様式によって、最も革新的で奇抜なアーティストとして、世界の耳目を集め続けているのに対して、白ロシア(現ベラルーシ共和国)出身のシャガールは、深い既視感を抱かせるその様式によって、心の琴線にふれる最も親しみやすいアーティストとして人々に広く受け入れられている。

この全く異なる様式の、それゆえ、全く異なる創意をもっていたと思われる二人の芸術家の作品を、対話のごとく並べて展示してみようとするこの展覧会は、世界にも例を見ない試みである。両者の作品を御覧いただければ、二人のアーティストに共通する、ひとつの強い願望のあることが理解されるであろう。

開館15周年記念講演会

「ピカソとシャガールの生涯—20世紀最大の劇芸術」講師：木島俊介(ポーラ美術館館長)

日時：4月29日(土)14:00-15:00(13:50開場) 定員：先着100名様まで(要当日入館券)

「ピカソの魅力(仮)」講師：大高保二郎(美術史家/早稲田大学名誉教授)

日時：8月12日(土)14:00-15:30(13:50開場) 定員：先着100名様まで(要当日入館券)

ゲルニカ80年スペシャルトーク・イベント

原田マハ「いまこそ《ゲルニカ》の話をしよう。」

日時：4月22日(土)

スペインの古都ゲルニカが世界初の空爆を受けてから2017年で80年が経ちます。2016年『暗幕のゲルニカ』(新潮社)を上梓した原田マハさんをお迎えし、『ゲルニカ(タピスリ)』の前でお話をいただきます。詳細はHPにてお知らせいたします。



© 森栄喜

みどころ 20世紀の戦争と混乱を生き抜いた、二人の巨匠



パブロ・ピカソ《花売り》
1937年 ポーラ美術館
©2016-Succession Pablo Picasso-
SPDA (JAPAN)



マルク・シャガール《誕生日》
1923年 AOKI ホールディングス
【展示期間：3/18-6/20】
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016,
Chagall®E2438

1 20世紀を代表する巨匠、ピカソとシャガール。 約80点の作品から二人の芸術の本質に迫る

ピカソとシャガールは、前衛芸術の中心地であった20世紀初頭のパリを拠点に、それぞれ独自のスタイルを切り拓き、二度の世界大戦と故国の混乱を経験しながらも、時代に向き合い、生涯にわたって旺盛に制作を続けました。

ピカソは絵画の革新に挑み続け、力強い線描により対象を激しくデフォルメする「破壊と創造の画家」として知られ、シャガールはあざやかな色彩により絵画を光で満たし、生涯にわたって自身の人生の物語や故郷の風景を主題に取り組んだ「物語と色彩の画家」として知られています。

20世紀の芸術を、対照的な取り組みにより牽引した彼らは、同じ時代を生きた同志でもあったのです。本展覧会では絵画を中心とした約80点におよぶ二人の作品を通して、その創造の軌跡をご紹介します。

2 フランスの個人所蔵家が秘蔵する貴重な作品が来日

シャガールは、第二次世界大戦の戦禍を避けてアメリカに亡命し、戦後は南フランスの町サン＝ポール＝ド＝ヴァンスにアトリエを構え、豊かな自然のなかで色彩表現を一層成熟させます。本展覧会では、ピカソも讃えたこの時代のシャガールの絵画に注目し、フランスから貴重な個人コレクションを借用し、展示いたします。

大戦前の不穏な空気の中で暗い色彩によって制作され、後にあざやかな色彩が加えられた《青い顔の婚約者》(1932, 1960年)をはじめ、この町を背景に恋人たちが抱き合う《サン＝ポールの上の恋人たち》(1970-1971年)、そしてギリシャ神話の場面をまばゆい色彩で描き出した《パエトーン》(1977年)など、シャガール円熟期の秀作が来日します。



マルク・シャガール《サン＝ポールの上の恋人たち》
1970-1971年 個人蔵
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016,
Chagall®E2438

3 幅6mを超える3点の巨大タペストリー、 その迫力で平和へのメッセージを体感

二人の芸術家は、戦争の不条理に対する怒りや絶望を表明し、平和への願いを込めた大型作品に挑戦しています。ピカソは、1937年にスペインの都市ゲルニカへ無差別の空爆が行われた悲劇に対し壁画《ゲルニカ》を制作し、シャガールは第二次世界大戦後、記念碑的な壁画やステンドグラスを手がけました。

戦後のフランスでは、人間性の復権を求めて伝統ある職人の仕事を見直す機運が高まり、芸術家たちと職人との協働が盛んに行われ、ピカソとシャガールの原画をもとに、卓越した技術を誇る織師の手でタペストリーが制作されました。本展覧会では、二人の画家の巨大なタペストリーによって、それぞれの芸術家の格闘と、織り込まれた深遠なるメッセージをご体感いただけます。



《ゲルニカ(タピスリ)》
原画：パブロ・ピカソ
タペストリー制作：ジャクリーヌ・ド・ラ・ボーム＝デュルバック、1983年、ウール、木綿 群馬県立近代美術館
©2016-Succession Pablo Picasso-SPDA (JAPAN)
【展示期間：3/18-5/11】

● 本展覧会に出品されるタペストリーの展示期間

- ・《ゲルニカ(タピスリ)》原画：パブロ・ピカソ 1983年、群馬県立近代美術館：3月18日～5月11日
- ・《ミノタウロマキア》原画：パブロ・ピカソ 1982年、彫刻の森美術館：5月13日～9月24日
- ・《平和》原画：マルク・シャガール 2001年、個人蔵：全会期

1世紀近い波乱に満ちた人生と、長きにわたる画業

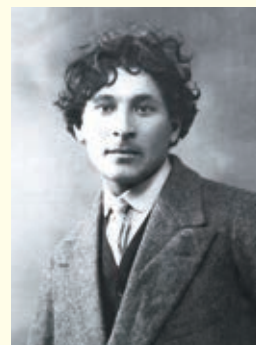


パブロ・ピカソ、1904年
リカルド・カルナス・イ・リャンビ撮影
By Courtesy of Succession Picasso, Paris & SPDA, Tokyo 2016

破壊する画家ピカソ。
スペインの早熟な天才は、パリで
キュビズムの旗手となった

パブロ・ピカソ
Pablo Picasso
(1881—1973)

物語を紡ぐ画家シャガール。
故郷ロシア、そして第二の故郷
パリが舞台となる



マルク・シャガール、1910年

マルク・シャガール
Marc Chagall
(1887—1985)

【誕生—故郷】

ヨーロッパの南西に生まれる。父は絵画教師

スペインのマラガ生まれ。少年時代と青年時代をバルセロナで過ごした。
絵画教師の父のもと早くから画才を発揮し、ラ・リョッジャ美術学校で本格的に美術教育を受ける。
同時にバルセロナで流行していた新しい美術・文芸運動に触れる。

ヨーロッパの東に生まれる

ロシア帝国統治下にあったヴィテブスク郊外のユダヤ教徒の家に生まれる。
サンクトペテルブルクで美術教育を受けるが、アカデミックな美術教育には馴染めず、フランスから帰国したロシア・アヴァンギャルドの芸術家レオン・バクストに師事する。

【パリへの旅立ち】

1900年、パリ・モンマルトルへ

1900年に初めてパリを訪れ、1904年から芸術家が集うモンマルトルの「バトー＝ラヴォワール」(洗濯船)に居をかまえる。
貧しい人々を青い色調で描く「青の時代」、優しく淡い色調で描く「バラ色の時代」を経て、1907年には《アヴィニョンの娘たち》(ニューヨーク近代美術館)の制作を契機に、ジョルジュ・ブラックとともに造形的な探究に乗り出し、「キュビズム」を創始する。

1911年、パリ・モンパルナスへ

1911年にパリへ移住。
1912年からモンパルナスの「ラ・リュッシュ」(蜂の巣)と呼ばれる集合住宅兼アトリエに住み、多くの芸術家と交流する。
当時、パリで隆盛していた「キュビズム」を取り入れつつも、独自の幻想的な世界を開拓し、詩人アポリネールの高い評価を得た。

【第一次世界大戦～1920年代】

パリにとどまり、成功を手にする

パリで活動が続け、第一次世界大戦後にはバレエ・リュス(ロシア・バレエ団)の舞台装飾の活動に参加し、古典的なスタイルへと転向する。
1918年、バレエ・リュスの踊り子オルガ・コクローヴァと結婚。
1921年、息子パウロ誕生。

ロシア革命の混乱に巻き込まれる

1914年、ヴィテブスク帰郷中に第一次世界大戦が勃発し、パリへ戻ることを断念。
1915年に故郷でベラ・ローゼンフェルトと結婚。翌年には娘イダが誕生。
1917年のロシア革命以降は、革命の理想に従ってヴィテブスクに美術学校を創設し、壁画の制作などを行う。しかし、マレーヴィチなど他の画家たちと対立し、1923年には家族と共にパリへと移住する。

【1930年代～1940年代】

祖国スペインの危機に対し、パリで絵筆を持って戦う

1930年頃から「シュルレアリスム」に接近する。
スペイン内戦時には、《ゲルニカ》(1937年、プラド美術館、ソフィア王妃芸術センター寄託)を制作。
第二次世界大戦時には、ドイツ軍によって占領されたパリにとどまり制作を続ける。

迫害から逃れるため、アメリカへ亡命

ナチスによるユダヤ人迫害に対し《白い磔刑》(1938年、シカゴ美術館)を制作。
パリを離れて地方に疎開し、1941年にはアメリカへと亡命。
ニューヨークを拠点に舞台芸術にも参加し、高い評価を得る。
1944年に最愛の妻ベラが急逝し、シャガールは失意の底に沈む。

【戦 後】

フランスを拠点に20世紀を代表する画家として、国際的に活躍する

戦後は南フランスに拠点を移し、カンヌやムージャンのアトリエにおいて、絵画のみならず陶芸や彫刻など多岐にわたり旺盛に制作を続けた。
91歳で歿

1948年にヨーロッパへと帰還。
1950年から南フランスのヴァンスに住む。
1966年にはサン＝ポール＝ド＝ヴァンスにアトリエをかまえる。
絵画をはじめ、陶芸やステンドグラス、壁画、タペストリーなど幅広い分野にわたって制作した。
97歳で歿

展覧会構成

故郷からパリへ、そして二度の世界大戦と故国の内戦に
翻弄された時代を経て、南仏で過ごした晩年までを辿ります

第1章 故郷 バルセロナとヴィテブスク

ヨーロッパの西と東の端から、芸術の都パリへと旅立つふたり。
去ってもなお絵画に現れる、生涯忘れえぬ故郷

ピカソにとって、故国スペインはつねに創造の源泉であり
続け、シャガールにとって、故郷ヴィテブスクの風景は生
涯を通して重要な主題となった。

ピカソは初期の作品から「青の時代」(1901-1904年)の代
表作、そして晩年に描かれた闘牛まで、生涯にわたり祖国
の風景と伝統を表現している。多感な時期を過ごしたバ
ルセロナの浜辺を背景にした《海辺の母子像》には、スペ
インの画家エル・グレコからの影響が認められる。

シャガールが生涯にわたって主題とした故郷は、豊かな自
然に囲まれ動物たちと共生するユダヤ人のコミュニティで
あった。彼の初期作品にはその素朴で力強い人々の姿が
留められている。故郷ヴィテブスクの風景は、のちに彼が
「第二の故郷」と呼ぶパリ、そして終の住処となったサン＝
ポール＝ド＝ヴァンスの風景と豊かに重なり合っていく。

Pablo Picasso

1881年 ピカソ、マラガに生まれる
1891年 父の転職にともない、ラ・コルーニャに移住
1895年 バルセロナに移住
1900年 居酒屋「エルス・クワトレ・ガッツ」で個展開催
初めてのパリ訪問

Marc Chagall

1887年 シャガール、ヴィテブスクに生まれる
1906年 絵画の修業のためサンクトペテルブルクに移住
1909年 のちに妻となるベラ・ローゼンフェルトと出会う
1911年 初めてのパリ訪問

パブロ・ピカソ

海辺の母子像

1902年 ポーラ美術館
©2016-Succession Pablo Picasso-SPDA (JAPAN)

パリとバルセロナを往復していた21歳のピカソ
が描いた「青の時代」の代表作。女性像はパリの
監獄で取材した女囚の姿に基づいているが、背
景にはバルセロナの浜辺が選ばれており、二つ
の都市のイメージが重ねられている。



マルク・シャガール

私と村

1923-1924年頃 ポーラ美術館
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016, Chagall®E2438

人間と動物たちが共生する故郷の生活を、幾何学的な
造形を用いて表現した作品。
牝牛と見つめあう農夫として自分の姿を描いている。
画家が最も愛した主題のひとつであり、自らの手もと
に置くために再制作した作品。

第2章 旅立ち 前衛芸術の都パリへ

独自の道を貫く二人の前衛芸術家

ピカソは1900年に、シャガールは1911年にパリに初めて足を踏み入れた。

ピカソは当初、パリの風俗に魅せられるが、1901年以降は青色を主調にして悲哀に満ちた人々の姿を描き、「青の時代」を迎える。その後、1907年にはブラックとともに、色彩を抑え形態を複数の視点から捉える「キュビズム」を創始した。ピカソは詩人アポリネールとともにパリの前衛芸術の首謀者となる。

遅れること約10年、シャガールがパリに到着する。当時、パリではピカソらの影響を受けた次世代のキュビストたちが盛んに活動していた。しかし、シャガールはすでに様式化しつつあったキュビズムの描法をそのまま取り入れることはなく、故郷に由来する主題から離れることはなかった。その結果、シャガールは幾何学的な表現を用いながらも、叙情性と幻想性に満ちた独自の作風を獲得する。



パブロ・ピカソ

裸婦

1909年 ポーラ美術館

©2016-Succession Pablo Picasso-SPDA (JAPAN)

恋人フェルナンド・オリヴィエが、岩山を背景に椅子に座る。対象を立方体の集合と、抑えた色彩で捉える方法はキュビズムと呼ばれた。

Pablo Picasso

- 1900年 初めてのパリ訪問、パリ万博に作品を出品
- 1904年 パリに定住。モンマルトルの「バトー＝ラヴォワール」(洗濯船)に居をかまえる
- 1907年 《アヴィニヨンの娘たち》を制作。キュビズムの創始、ブラックとともに幾何学的な様式を模索する
- 1912年 コラージュの導入、総合的キュビズムへと展開
- 1914年 第一次世界大戦が勃発

Marc Chagall

- 1911年 初めてのパリ訪問。ベラと婚約
- 1912年 モンパルナスの集合アトリエ「ラ・リュッシュ」(蜂の巣)に住む
- 1914年 ロシア帰国中に、第一次世界大戦が勃発
- 1915年 ベラと結婚

マルク・シャガール

世界の外へどこまでも

1915-1919年
群馬県立近代美術館(群馬県企業局寄託作品)
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016.
Chagall®E2438

ボードレールの詩のタイトルが付けられた作品。シャガール自身の頭部＝精神は、肉体から切断されて「世界の外へ」と自由になる。シャガールは絵画から詩情を切り離すことは決してなかった。



● 二人のエピソード

この頃、ピカソとシャガールは、共にパリで活動していたが、深く交流することはなかった。シャガールは詩人で美術批評家のアポリネールにピカソを紹介してくれと頼んだが、「会わない方がいい」と断られたと言われている。

第3章 愛しいものたち 変容する絵画

身近な人や物が画面の中で変容する。対照的な「愛」へのアプローチ

第一次世界大戦の混乱後、ヨーロッパは「狂騒の20年代」を迎え、アール・デコやシュルレアリスムなど、新しい芸術の潮流が隆盛し、ピカソとシャガールも芸術家として名を馳せるようになった。二人は、ともに家族を得て、作品も幸福に満ちた明るい画面へと変貌していく。

ピカソとシャガールは、ともに生涯にわたって、家族や恋人など、愛する人々の姿を描いているが、二人の表現は大きく異なり、描く対象にそそぐまなざしも対照的であった。

ピカソは身近な人や物を描きながらも、キュビズムや古典的な描法、またシュルレアリスムから影響を受けた手法など、さまざまなスタイルにより対象のヴォリュームを客観的に捉え、即物的な形態へと変形させた。

シャガールは、自らの化身である恋人たちが抱き合う姿を高揚感の表象として引き伸ばし、あるいは情念が渦巻くままに変形させ、幸福な思い出の象徴である花や鳥たちとともに幻想的な情景に創り上げている。

パブロ・ピカソ

葡萄の帽子の女

1913年 ポーラ美術館

©2016-Succession Pablo Picasso-SPDA (JAPAN)

恋人エヴァ・グエルの顔を、ギターあるいはヴァイオリンの優美な曲線のシルエットと重ね合わせている。ピカソが愛した静物のモチーフと恋人の肖像が融合した作品。



マルク・シャガール

青い顔の婚約者

1932, 1960年 個人蔵

©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016, Chagall®E2438

婚約者と画家の頭が合体する祝福の場面が描かれる。

画家は1932年に着手したのち、1960年にあざやかな色彩を用いて音楽家たちや花を加筆し、完成させた。



Pablo Picasso

- 1917年 バレエ・リュスの舞台装置等を制作
- 1918年 オルガ・コクローヴァと結婚
- 1921年 息子パウロが誕生
- 1927年 マリー＝テレーズ・ワルテルと交際を始める
- 1935年 マリー＝テレーズとの間に娘マヤが誕生

Marc Chagall

- 1916年 娘イダが誕生
- 1917年 ロシア革命
- 1919年 ヴィテブスク美術学校の校長に就任(翌年退職)
- 1922年 自伝『わが回想』を完成
- 1923年 パリに戻る

●二人のエピソード

ピカソとシャガールはともに、この2点の絵画の制作過程において、いったん描いたモチーフの形態や色に変更を加え、重ね描きを行っている。



第4章 戦争 悲劇への抵抗

戦火が迫る故郷とパリ、 大画面に込められた平和への祈り

1939年に勃発した第二次世界大戦は、祖国スペインをファシストであるフランコ政権に支配され、パリに留まったピカソと、ユダヤ人として迫害の危機にさらされ、アメリカへ亡命したシャガールを奮起させた。戦争の悲惨さを目の当たりにした二人は、「愛」と「平和」という共通のメッセージを、壁画やタペストリー、ステンドグラスなど、多様な表現方法によって力強く発信した。

ピカソは大戦前の1937年に、祖国スペインの都市ゲルニカへの無差別爆撃に反応して、『ゲルニカ』を制作し、パリ万国博覧会に出品した。ピカソはそれまで画面から排除してきた「物語」の表現へと近づいたのである。

シャガールは、ナチスによるユダヤ民族への迫害に深く心を痛めた。1941年にアメリカに亡命し舞台芸術などを手がけて成功を収めるものの、1944年には大戦の終結を待たずに最愛の妻ベラが急逝し、シャガールは悲しみに暮れた。あざやかだった彼の画面は暗い色調が支配的になり、色彩に関する思考を一層深めることになった。

ゲルニカ (タピスリ)

原画：パブロ・ピカソ

タペストリー制作：ジャクリヌ・ド・ラ・ボーム＝デュルバック
1983年 ウール、木綿 328×680cm 群馬県立近代美術館
©2016-Succession Pablo Picasso-SPDA (JAPAN)

【展示期間：3/18-5/11】

人間や動物たちが逃げ惑う場面によって、 ファシズムの暴力を告発した超大作。

本作品は、1937年スペインの古都ゲルニカへの無差別爆撃という事件をもとに制作された壁画『ゲルニカ』のタペストリーである。

牡牛は野蛮性を、馬は民衆の姿を象徴するとの解釈もあるが、ピカソ自身は最終的に「鑑賞者が見たいように見れば良いのだ」と述べている。

『ゲルニカ』のタペストリーは計3つのヴァージョンが制作され、本作は第3作目である。第2作と本作には、ピカソが色の修正と縁どりを指示した。第1作はニューヨークの国連本部内に架けられており、第2作は大戦末期に激しい戦闘が繰り広げられたフランスとドイツの国境付近に位置するコルマール市のウンターリンデン美術館に所蔵されている。

画家とタペストリー作家の関係

第二次世界大戦後のフランスでは、伝統ある職人仕事を見直す機運が高まり、芸術家たちはタペストリー作家と協働し、タペストリー作品を制作した。ピカソとシャガールが信頼を寄せた二人の作家は、ともに原作を単に写すのではなく、卓越した技法を駆使して、迫力や色のあざやかさを表現した芸術家であった。

『ゲルニカ (タピスリ)』の制作者：ジャクリヌ・ド・ラ・ボーム＝デュルバック(1920-1989)
ピカソが信頼を置いていたタペストリー作家。

『ゲルニカ』をはじめ、代表作のタペストリー制作を依頼された。

『平和』、『ミノトーロマシー』の制作者：イヴェット・コキール＝フランス(1928-2005)
絵画を学んだ素地を活かし、巧みな諧調表現を得意としたタペストリー作家。

1964年にアンドレ・マルローの紹介でシャガールと出会い、30点を超えるシャガールのタペストリー作品を生涯にわたって制作している。また、1965年からはピカソ作品のタペストリーも手がけた。



イヴェット・コキール＝フランスとマルク・シャガール
パリのシャガール邸にて、1972年

ミノタウロマキア

原画：パブロ・ピカソ
タペストリー制作：イヴェット・コキール＝フランス
1982年 ウール 315×450cm 彫刻の森美術館
©2016-Succession Pablo Picasso-SPDA (JAPAN)
©Yvette Cauquil-Prince, ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016 E2438
[展示期間：5/13-9/24]

《ゲルニカ》の源泉となるミノタウロスの物語に基づいた場面。迫りくる怪物の恐怖は第二次世界大戦前夜の不安を物語る

ピカソは、1930年代を通してギリシア神話に登場する牛頭人身の怪物ミノタウロスに強い関心を抱き、1935年には本作品の原画となる版画を制作した。

ミノタウロスが表現する激しい暴力性は、迫り来る世界大戦への不安を物語り、逃げ惑う動物や人々、そして少女の持つ灯火といったのちの《ゲルニカ》にも描かれるモチーフが登場する。

このタペストリー作品は、イヴェット・コキール＝フランスによって制作され、原作の持つ迫力が忠実に引き継がれている。小さな版画をもとに大画面に移し替えられたこの作品からは、原画では捉え難い細部においても、ピカソが込めたメッセージを読み取ることができる。



Pablo Picasso

- 1935年 絵画制作を中断。詩作にはげむ
- 1937年 《ゲルニカ》制作
パリ万博スペイン共和国館に展示
- 1939年 第二次世界大戦勃発
- 1940年 パリがドイツ軍に占領されるも、
パリにとどまる
- 1944年 フランス共産党に入党

第二次世界大戦の悲劇を乗り越えたシャガールが、国や宗教、民族間の対立を越えた人類の平和への願いを込めて制作した壮大な作品。

本作品は、ニューヨークの国連本部の記念講堂に設置されたステンドグラス《平和》の下絵に基づいたタペストリーである。フランス北東部の国境の都市サールプールの依頼によって制作された。

この制作にあたり、タペストリー作家は、色彩の組み合わせやウールの織り方を調整するなど技巧を凝らし、光がガラスを透過しているかのような色彩表現を獲得している。

シャガールの原画によるタペストリーのなかでも最大である本作品には、宗教の違いや国境を越えた、彼の平和への願いが込められている。

シャガールの言葉によると、画面は3つのテーマに分けられている。

- ・画面右：キリストやユダヤ教の聖職者を囲む群衆…「平和を望む人類」
- ・画面中央：擬人化された動物たち……………「平和の象徴」
- ・画面左：墜落するイカロスなど……………「平和のために闘う人々」

Marc Chagall

- 1933年 ナチスによって退廃芸術に指定される
- 1937年 フランス国籍を取得
- 1939年 第二次世界大戦勃発。ロワール地方に疎開
- 1941年 アメリカに亡命
- 1944年 妻ベラ急逝
- 1946年 ニューヨーク近代美術館で大回顧展
- 1948年 フランスに戻る

平和

原画：マルク・シャガール
タペストリー制作：イヴェット・コキール＝フランス
2001年 ウール 410×620cm 個人蔵
©After an original work by Marc Chagall-Yvette
Cauquil-Prince 2016 E2438
[展示期間：全会期]



第5章 南仏のアトリエ 愛と平和の讃歌

戦後は、ともに南フランスに移住し二人は初めて親しく交流する。
陶芸、彫刻、壁画など多岐にわたる分野で旺盛に制作を続け、
互いの才能に敬意を表した

第二次世界大戦が終結した後、ピカソはパリを離れて南フランスのカンヌ近郊に居を移し、陶芸、彫刻、版画、壁画を手がけ、20世紀を代表する画家として君臨した。シャガールもまた、1950年に南フランスのサン＝ポール＝ド＝ヴァンスに移り住み、同じく陶芸の制作に励んだ。

ピカソとは家族を交えて食事をし、ともに陶芸の制作を行うなど、親しく交流して触発もあったが、後にある夕食会の場で、酔ったピカソが悪い冗談を言ったことから、二人の友情はついでにしまう。

しかし、ともに異国からフランスに渡り、困難な時代を生きた二人の芸術家は、互いに敬意を失わず、唯一無二の好敵手であり続けた。南仏のアトリエで、ピカソは妻ジャクリーヌをモデルに画家としての挑戦を最期まで続け、シャガールはサン＝ポール＝ド＝ヴァンスの風景に故郷への想いを重ね、色彩表現に無上の輝きを与えた。

Pablo Picasso

- 1947年 ヴァロリスで陶器制作
- 1955年 カンヌ郊外の別荘「ラ・カルフォルニー」を購入
パリ装飾美術館で大回顧展
- 1958年 エクス郊外のヴォーヴナルグ城を購入
- 1961年 ジャクリーヌと結婚
ムージャンのノートル＝ダム＝ド＝ヴィに移る
- 1973年 4月8日ムージャンにて死去(享年91歳)

Marc Chagall

- 1950年 ヴァンスのレ・コリーヌ荘を購入
- 1952年 ヴァヴァ(ヴァランティーナ・プロドスキー)と結婚
- 1955年 聖書に取材した壁画を制作
- 1958年 パレエ「ダフニスとクロエ」の舞台装置と
衣装デザインを手がける
ステンドグラスの制作をはじめ
- 1964年 パリ、オペラ座の天井画が完成
- 1985年 3月28日サン＝ポール＝ド＝ヴァンスにて死去(享年97歳)



マルク・シャガール

赤い背景の花

1970年 AOKIホールディングス
[展示期間: 3/18-6/20]
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo,
2016, Chagall® E 2438



パブロ・ピカソ

座る女

1960年 富山県美術館
[展示期間: 3/18-6/20]
©2016-Succession Pablo Picasso-SPDA (JAPAN)

ピカソにとって女性像は、生涯にわたって取り組んだ主題であった。激しく歪曲された人体の表現には、79歳を迎えても、なお絶え間ない造形的探究を続ける画家の挑戦をみることができる。



マルク・シャガール

サン＝ポールの上の恋人たち

1970-1971年 個人蔵
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016, Chagall® E 2438

教会の高い塔を中心としたサン＝ポール＝ド＝ヴァンスの町を背景に、前景にクローズアップされた花束が、幸福な場面を祝福する。花束は色彩の実験に欠かすことのできないモチーフであった。

画家とモデル 恋人と家族

愛する息子に投影する、スペイン人の血の誇り

ピカソはなによりもまず、人物像の画家である。

ピカソほど、観る者に強烈な印象とともに記憶される数多くの人物像を世に送り出した画家はいないだろう。

「青の時代」の憂いをおびた男女の姿、妻オルガをモデルにしたギリシア彫刻のような優美な女性、そしてモンスターに変貌した恐るべき女性たち。獲物を前にした闘牛士のようにピカソはモデルに対峙し、画家がその時々に向かっていった「絵画芸術とはいかなるものか?」という課題の核心を、絵筆によって鋭く突いている。また、愛息を堂々とした肖像画に描いた《花束を持つピエロに扮したパウロ》にみられるように、作品には画家とモデルの関係と、画家自身の心理状態が少なからず反映されている。



パブロ・ピカソ

花束を持つピエロに扮したパウロ

1929年 ポーラ美術館
©2016-Succession
Pablo Picasso-SPDA(JAPAN)

1921年に、妻オルガとの間に息子パウロが誕生すると、ピカソは彼をモデルにいくつかの作品を手がけた。本作品は、他人の手に渡った息子の肖像画の代替として制作したもの。襷襟をつけ、色とりどりの花束と杖を手にした少年が、スペインの伝統的な宮廷肖像画のように堂々と正面を見据えている。

Picasso

- ・フェルナンド・オリヴィエ (1881–1966)
[交際期間：1904年–1912年頃]
- ・エヴァ・グエル (マルセル・アンペール)
(1885–1915)
[交際期間：1911年頃–1915年]
- ・オルガ・コクローヴァ (1891–1955)
[交際期間：1917年–1918年]
[婚姻期間：1918年–1955年]
息子：パウロ (1921–1975)
- ・マリー＝テレーズ・ワルテル (1909–1977)
[交際期間：1927年–1940年代]
娘：マヤ (マリア・デ・ラ・コンセプション)
(1935–)
- ・ドラ・マール (テオドーラ・マルコビッチ)
(1907–1997)
[交際期間：1936年–1946年]
- ・フランソワーズ・ジロー (1921–)
[交際期間：1943年–1954年]
息子：クロード (1947–)
娘：パロマ (1949–)
- ・ジャクリヌ・ロック (1926–1986)
[交際期間：1954年–1961年]
[婚姻期間：1961年–1973年]

第二の故郷パリの、恋人たち、芸術家たち

シャガールの絵画には、カップルの姿が繰り返し登場する。

画家が故郷の美しい風景を再現すべく絵筆を運ぶ中で、愛をはぐくむ男女の姿は必須であった。ぴったりと抱きあう男女のほとんどは、画家と最愛の女性とが一体化した二重肖像であり、他者としてのモデルがシャガールの世界に入り込むことはない。高揚する愛により二人の体は宙を舞い、闇夜に点された炎のごとく青く、白く、ときに赤く燦然と輝く。シャガールはその場面の目撃者であり主人公でもあった。《オペラ座の人々》では、カンヴァスの左下方に帽子を被ったシャガールの自画像が描き込まれている。



マルク・シャガール

オペラ座の人々

1968-1971年 ポーラ美術館
©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2016,
Chagall® E2438

背景に描かれたオペラ座は、パリを代表する建造物である。シャガールが舞台装置と衣装デザインを担当したバレエ『ダフニスとクロエ』が上演され、1964年には巨大な天井画を制作した場所である。

オペラ座の天井画制作は、シャガールがフランスの国民的画家として受け入れられたことを意味している。

Chagall

- ・ベラ・ローゼンフェルト (1895–1944)
[交際期間：1909年–1915年]
[婚姻期間：1915年–1944年]
娘：イダ (1916–1994)
- ・ヴァージニア・ハガード (1915–2006)
[交際期間：1945年–1952年]
息子：ダヴィッド (1946–)
- ・ヴァヴァ (ヴァランティーナ・ブロードスキー)
(1905–1993)
[交際期間：1952年]
[婚姻期間：1952年–1985年]

ふたりの対話

monologues and dialogues

ピカソからシャガールへ シャガールからピカソへ

◆ シャガールの色彩を讃えるピカソ

「ルノワール以来、光に対する感覚を持っているのはシャガールしかいないと、私に確信させるものがある。」

[ピカソが伴侶フランソワーズ・ジローに語った言葉、1950年代初頭]

● ピカソを批評する晩年のシャガール

「なんとすばらしい天才だ、ピカソは。ただ、絵を描かないのは残念だ。」

[シャガールがフランソワーズ・ジローに語った言葉、年代不詳]



フィリップ・ハルスマン撮影「ピカソとシャガール」
1950年代初頭

© Philippe Halsman / Magnum Photos

By Courtesy of Succession Picasso, Paris & SPDA, Tokyo 2016

● シャガール、妻ベラと愛について

「私はただ私の窓しか開けなかった。すると彼女と一緒に青い空気、愛情、花が入り込んできた。白ずくめの衣装、または黒ずくめの衣装で、彼女は私の芸術を導きながら、ずっと以前から私の画布の向こうをとんでいた。」

[シャガール『わが回想』、1931年]

◆ ピカソ、愛について

「すべての根源には愛だけがある。(中略)

画家は愛を謳うために盲目となるほうが良いのだ。」

[ピカソが出版者テリアードに語った言葉、1932年]

【報道に関するお問い合わせ】

・ポーラ美術館 広報事務局 担当：森下、三ツ木

TEL.03-6805-0436 / FAX.03-6805-0437

Mail: polapr@epochseed.jp

・ポーラ美術館 広報担当：中西

TEL.0460-84-2111 / FAX.0460-84-3108